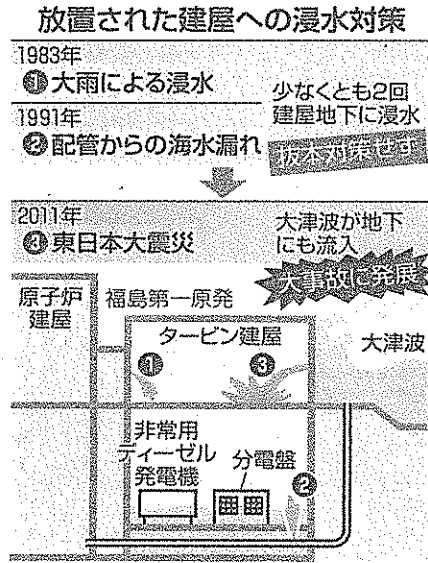


東電 浸水対策先送り

過去にも非常用発電機水没

大津波で全電源を失い、重大事故を起こした東京電力福島第一原発で、少なくとも一九八三年と九一年の二回、大雨や配管からの水漏れで非常用ディーゼル発電機が水没する事故が起きていたことが、元東電社員や作業員らの証言で分かった。水没を教訓に、発電機などを安全な場所に移していれば、重大事故を防げた可能性がある。

一件目は八三年に3、4号機で発生。大雨がケーブルのすき間や通気口などからタービン建屋地下に流れ込んだとみられる。当直で



たと説明している。だが、東電は公表せず、トラブル関連資料にも記録はなかった。もう一件は、九一年十月三十日に1号機で発生。木

村さんや東電がまとめたトラブル関連資料によると、冷却用の海水を引き込む配管が腐食して数センチの穴が開き、大量の海水が建屋地下の床に漏れ出し、発電機が浸水した。

非常用発電機は、外部からの電気供給が止まった際に自動的に起動する。東日本大震災では福島第一1、4号機とも建屋の通気口などから津波による海水が流入した。発電機のほか、各所に電気を配る分電盤、蓄電池も水没。原子炉の制御どころか、計器を読むことすら困難な状況に陥った。木

村さんは九一年の浸水後、「津波が来たら地下の非常用発電機が水に漬かって使えなくなると思い、過酷事故対策が必要だと上司に話した」と振り返る。だが、

上司からは「君の言う通りだが、安全審査をしている人間の中では津波と過酷事故を関連づけるのはタブーだ」と言われたという。男性作業員も「現場では

福島第一の津波に対する弱点が認識されながら、東電と監督官庁は対策を先送りしてきた。その責任は重い」と話した。